

考古学生活 20 年 - 後輩諸氏へのメッセージ

北村圭弘（滋賀県文化財保護協会）

今から思うと、私の考古学生活の出発点は 3 回生のときにあったようです。当時たずさわっていた石川県能美窯跡群の分布調査のなかで、瓦陶兼業である湯屋窯跡に接したことから、現在もメインの研究テーマである古代瓦に興味をもつようになりました。それは昭和 60 年（1985）のことですから、私の考古学生活は今年でちょうど満 20 年を迎えることになります。

卒論では近江の古代寺院を研究テーマとし、学部卒業とともに出身地の滋賀県に戻りました。（財）滋賀県文化財保護協会勤務を振り出しに滋賀県教育委員会安土城郭調査研究所、

滋賀県立安土城考古博物館勤務を経て、今また（財）滋賀県文化財保護協会に勤務しています。幸いにも比較的頻繁に異動転勤したことから、行政発掘のほか史跡整備や学芸業務に携わるとともに、城郭や城下町、古代国家形成史といった研究テーマに取り組む機会を得ることもできました。興味の対象が大きくひろがった20年間であったと感謝いたしております。

ところで、いま頼まれて大津宮跡を研究テーマとする学生を預かっています。ちょうど3回生ですから、自分が考古学に取り組みはじめた頃のことを思い出します。「20年前はこんなふうだったのか」。そう思うと同時に「まいにち考古学ばかりやっているのに、私は20年たってもこの程度か」などと、やや複雑な気持ちになったりします。そしてもう20年も経てば定年退職という事実が厳然として横たわっているのですから「この10年間くらいで、少しは研究をまとめていく方向で仕事をしていかないと、考古学的にはなにもしないまま一生が終わってしまうかもしれない」といった焦りの思いも募ってきます。就職時に立ち返ると、初心は考古学が続けられるという以上に「古代寺院研究が続けられる」だったわけですから！

他方、異動転勤のたびごとに新しいテーマに取り組むという状況のなかで、本来のテーマによる研究が挫折しそうになったこともしばしばありました。それでもなんとか細々とながらも古代寺院研究をつづけて来られた理由は、一生懸命になって卒論に取り組んだ経験があったからだと思っています。つまり3回生のときに、卒論のテーマを近江の古代寺院に決めるとともに1年間留年するという勝手な計画を立て、5回生のときには主に滋賀県にいて古代瓦の実見につとめたのです。結果、卒論そのものは取るに足らない駄作に終わってしまいましたが、「平瓦の破片をみれば、近江のどこの寺跡出土品なのか解る」と、うそぶける程度になりました。このときに頑張って古代瓦にくらいついていった経験こそが、今になってもしつこく古代寺院研究をつづけている基礎を形成したと感じています。

最近、私ははじめてギックリ腰を体験しました。「とても痛くて動けない!」。あの重い古代瓦を相手に、今後どれだけ頑張れるか、体力的にははなはだ覚束ないところもありますが、意欲はまだまだ衰えていません。考古学の魅力をとともに分かち合えるよう、在学中の後輩諸氏にはとりあえず卒論で頑張ってくださいと伝えたいと思います。